

西アジア、ステレオタイプからスタートしてみよう

清風南海学園中・高等学校 富田 健太郎

はじめに

地理Aでは地理Bほど詳細ではないが、地形や気候の系統地理の学習の後、地誌分野として近隣諸国や地域の学習を行う。系統地理で学習した内容をふまえて、地形・気候・農業・工業・民族・文化など様々な地域の特色を学習する。その際、「特色を知る」だけでなく、地理的な事象・現象を「地理的な見方・考え方」で考察していくところが、地誌学習のおもしろさでもある。教科書では「世界の多様性の理解のために」で西アジア・北アフリカを取り上げている。西アジア・北アフリカの地域を取り上げることで、中央アジアのトルコ・イスラーム文化圏や中南アフリカ地域へと関連地域を広げていくのも可能だが、ここでは『世界を学ぶ高校生の地理A (最新版)』(以下教科書)と『地歴高等地図(最新版)』(以下地図帳)を使って西アジアを中心に授業展開を考えてみたい。

1. 西アジアの自然環境を概観してみよう

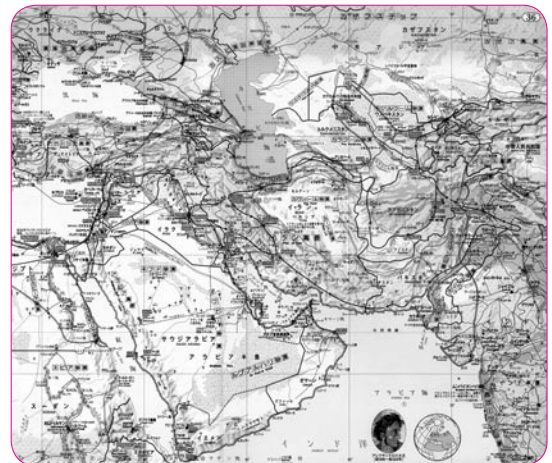
西アジアを教えるとき、あまりなじみのなさそうな地域なので、生徒の予備知識はどれくらいだろうという疑問がまず起こる。場所を知っているのか、イメージはどうか。あまり期待せずに聞いてみると案の定、期待は裏切られなかった。国名は知っていても場所を知らないという生徒が多く、地図で確認しなければいけない。イメージについても、報道や過去の学習で「戦争・テロ」、「乾燥・砂漠」、「石油」、「イスラーム(イスラム教)」といったステレオタイプのイメージがほとんどである。

2. メソポタミアを中心に展開してみる

まず、自然環境を「乾燥・砂漠」と一言では片付けられないことをみてみよう。地図帳p.35、36をみると、砂漠以外にも高原・山脈がたくさんあることがわかる。また、ティグリス川・ユーフラ

テス川沿いをはじめ、緑色の地域もみられる。ティグリス川とユーフラテス川という外来河川は、その不規則に起こる洪水によって、古代には肥沃な三日月地帯といわれメソポタミア文明が起こった。シュメールやバビロニア王国などの古代都市が作られ、小麦やぶどうのような作物を栽培し、いわゆる地中海農耕文化の発祥地になった。そのようすは地図帳p.40で確認できる。また、アルファベットの起源となる文字の発明やユダヤ教をもとにキリスト教、イスラームが発達していった。導入部分では、この地域でいきいきとした人間活動が営まれ、決して西アジアは「不毛の地」ではないことを確認したい。次の展開では導入で農耕やイスラームにふれているので、オアシス農業やイスラームについて話を広げていく。

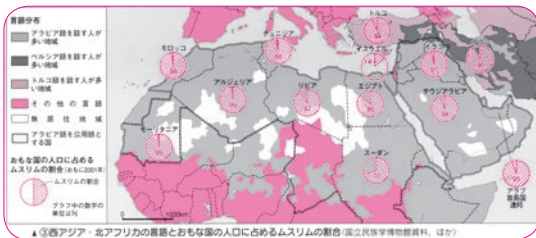
まず、イスラームだが、どの地域がおもなイスラーム地域なのだろうか。多くは、西アジアと北アフリカと答えるだろうが、地図帳p.125「④世界の宗教」で中央アジアまで広がっていることに気づく(東南アジアもあるが、ここではあまり重視しない)。この広がりはどうのようにしてもたらされ



『地歴高等地図 (最新版)』 p.35-36

たのだろうか。それを確認できるのが、地図帳 p.34-36 「①西アジア・北アフリカ・地中海」のイスラーム帝国やオスマン帝国の勢力地域である。うまく、2つの地図を重ねて考えることでイスラーム地域の広がりや理由が理解できる。

では、イスラームと民族の関係はどうだろうか。多くの生徒はイスラーム＝アラブ人というイメージを持っているだろう。しかし、先ほどみたイスラーム地域すべてがアラブ人地域だろうか？ 疑問に思う生徒も出てくるだろう。そのとき、教科書 p.99 「③西アジア・北アフリカの言語とおもな国の人口に占めるムスリムの割合」をみてみよう。



『世界を学ぶ高校生の地理A (最新版)』 p.99③

人口に占めるムスリム(イスラム教徒)の割合と民族との関係がわかる。アラブ人以外にもトルコ人、ペルシア人もいる。考えてみれば、世界史でこの地域を支配したのはアラブ人以外、ペルシア人もトルコ人もいるわけで、当たり前と言えば当たり前である。ただ、アラブ系キリスト教徒のいるレバノンやイスラエルについてもふれておくことで、地域の多様性ととともに、ユダヤ・キリスト教の発祥地であることも再度思い出させておきたい。

イスラームの最後はムスリムの生活をみて、私たちとは大きく生活スタイルが違うことをみてみよう。教科書 p.99 「④イスラームの五行」「⑤イスラームの日常生活におけるきまりごと」「⑥イスラーム暦」をみて、ムスリムは六信五行を実践し、日常生活では様々なきまりごとがあることに、多くの生徒は驚くのではないだろうか。『図説地理資料 世界の諸地域 NOW 2007』(以下NOW) p.78-79の写真も有効である。厳しい生活の規則もトルコのように政教分離の国では緩く、国によって程度は違う。時間があるなら、各国の違いをまとめてみるのもおもしろいのではないだろうか。

農業は乾燥した地域だから相当厳しい環境の中で営まれている。西アジアには耕作に適した耕地が10%ほどしかない。そのため、耕作民のほかにもベドウィンのような遊牧民もいる。降った雨のうち3分の2は蒸発散で失われてしまい、「余った水」が生じるのは西アジアでは限られた地域で、北部の山岳地域のみである。地図帳 p.121のケッペンの気候区分ではCsの地域である。ティグリス川とユーフラテス川の水のほとんどが雪解け水である。「余った水」は川以外に地下にも流れる。山地と平地の間の扇状地には「余った水」の帯水層がある。これを利用したのが、カナートである。NOW p.81⑦にイランのカナートの写真があり、水をいかに引いてくるかをみてみよう。

西アジアでは灌漑農業が主となるが、時間があれば、センターピボットやアラビア半島で最も農業が盛んなイエメンや地中海沿岸・カスピ海沿岸の地中海式農業にもふれておくことで、農業の多様性を理解したい。また、教科書 p.100 「③砂漠のなかにつくられた牧場」の写真にあるような、サウジアラビアのエアコン完備の牛舎をみると、資本投資しているのがわかるが、それを可能にしているのは何かを考えてみるのもいいだろう。

3. 地形を中心に展開してみる

アラビア半島は確かにケッペンの気候区分ではBWだが、砂漠一辺倒ではなく、植生のあるBS、Cs地域もある。地図帳 p.40 「①オリエント」をみ

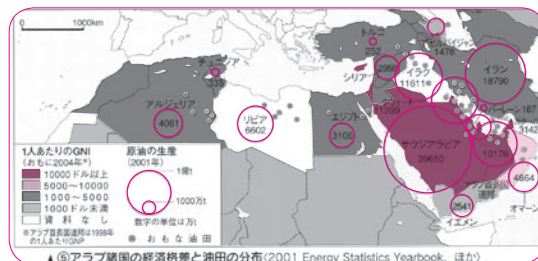


『地歴高等地図 (最新版)』 p.40①

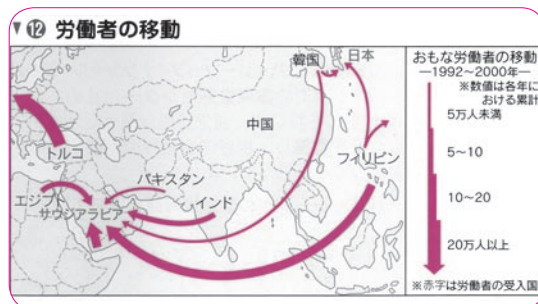
ると、土地の起伏の状態や植生・土地利用がよりわかる。200m以下の低地は少なく平野が少ない。それはアラビア半島がアフリカ大陸とともに、 Gondwana大陸由来の楯状地であり、アナトリア高原～ザグロス山脈・イラン高原はアルプス・ヒマラヤ造山帯であるからである。また、紅海に着目させて、アフリカ大地溝帯から続く大地の亀裂があり、アカバ湾を通して死海まで続いていることを気づかせる。地図帳p.41「①パレスチナ」ではその亀裂の深さが表現され、死海の湖面標高をみれば、生徒は驚くのではないか。それに、NOWp.76「①死海」の写真をみれば、塩湖であることもわかる。また、アラビア半島も紅海側は標高が高く、ペルシア湾に向かって傾斜している。イエメンのナビーシュアイブ山は標高3760mある。ここにイエメンがアラビア半島一の最多降水量国である理由が隠されている。地理A選択者には難しいかもしれないが、地図帳p.123-124から南西季節風による地形性降雨に気づいてほしい。このように西アジアの地形環境は案外、多様性をもっていることに気づかせながら、農業との関わりについても理解を深めていきたい。

次に地図帳p.40をみて、おもな油田と地形との関係のみてみよう。新期造山帯沿いに油田が分布していることに気づくだろう。NOWp.83には「なぜ西アジアに油田が多いのか」という小コラムがある。石油開発に関してはメジャーとOPECの関係にふれながら説明する必要があるだろう。現在の石油による恩恵は西アジアにおいては非常に大きい。エアコン完備の牛舎ができるのは、石油のおかげでもある。また、水が少ない地域なのに、飲み水に困っているというニュースがあまり流れないのは、日本企業による海水淡水化プラントのおかげであり、それも石油の恩恵である。教科書p.100にあるようなリヤドの市街地も本当に砂漠の国とは思えない。ドーハやドバイのようなリゾート地もある。ドバイは旅行の観光パンフレットをみれば高級リゾート地であることがよくわかる。このように、石油の恩恵は多大なものといえるが、湾岸戦争のような負の面もあることも忘れてはな

らない。また、教科書p.101「⑤アラブ諸国の経済格差と油田の分布」をみて、産油国と非産油国との所得格差という面もある。NOWp.83「産油



『世界を学ぶ高校生の地理A(最新版)』p.101⑤
 国に集まる外国人労働者⑫労働者の移動」の図と関連させて考えさせてみたい。



『図説地理資料 世界の諸地域 NOW 2007』p.83⑫

4. おわりに

西アジアはあまりなじみがないが、断片的なイメージをいくつか持っている地域である。ただ、断片的なイメージでは地域の全体像を把握するのは難しい。地域の多様性にも目を向ける必要がある。生徒の持っている断片的なイメージから切り込んで、様々な地理的な事象が相互に関連しあっていることに気づかせることで、「地理的な見方・考え方」を養っていくことにつながる。その際、有効なのは地図帳である。場所を確認するだけでなく、地図帳の表現方法(土地の起伏、標高別、土地利用別など)をうまく利用していくのが生徒のイメージをふくらませるのに役立つのではないだろうか。

参考文献：岩淵孝著『地球を旅する地理の本 3 西アジア・アフリカ』大月書店 1993
 田辺裕監修『図説大百科 世界の地理 15 西アジア』朝倉書店 2000